



その川を、下川だという者もいれば、霜川だという者もあり、しかし本当に名前がついてるんですかとなると、近所の者がそういうばかりで、地図にも載っていない。

だったら町の担当だろうと、県の担当もいやそうにそっぽを向くのは、その川というか、いや、いっそ水路と言ってしまえ、とにかく梅雨時になると水かさが増す。

床下浸水はよくあることで、下手をすると畳まで濡れかねない。どうにかしてくれろと言うのは無理もないのだが、しかし、その水路の両岸に土手すら無く、直に立ち並ぶ家の方も悪いので、そうして強くも言えないのは、いったい全体それら水路際の家々の住人が何の権利でそこに住んでいるのか、水路を含めてそこいら一帯登記も公図もどこがどこやら見当もつきかねて、住んでる本人たちもその父や祖母から経緯を聞いた者はなく、物事はっきりされると自分たちも困るからなのだ。

それでもタタミが濡れるのは困るというので結局苦役である。昭和の何十年代だかには自分らで鍬だのシャベルだの、威勢のいいのはどこで借りてきたのか掘削機など降ろして底を掘った。

掘ったのは掘ったが何しろ幅は2メートルか3メートルか、いくら掘っても梅雨時にはそれ水が上がったと大騒ぎである。それほど毎年騒いだところが、その水路が続く本線河川の改修が終われば嘘みたいに水は引いた。

なんのことはない。本線のハケが悪くて水が流れなかっただけの訳で、それなら昔、本線河川の改修をしるとやかましく言えばよかったんだと気のきいた者は思いついたがもうどうでもいいや。被害が無くなったら今度は立ち退けと言われることだけが心配だから、なんとなくボーッとしておくのが一番である。

兩岸木造家屋が際まで迫って改築だのと一人前に二階建てなど増えてくると、人力とはいえ長年ざらえしてきた川底を今は逆にちょろちょろと日の光に光るのでそれとわかる水面は、切り立った峡谷の底のよう。一階の窓から下をみても暗くてよくわからない水路の下まで、十メートルはあるんじゃないか。佐田孝作は娘の給食費を落っことしてしまったのであった。

家内は怒る。何をしてんだというのである。別に酒や博打で使ったわけではないのだが、彼は元来そういうものをしないから、そもそも比較はしてくれない。

ただ何やってんだということで、そりゃ見ればわかるだろ。ただ落としちゃったんだよ。水路は暗くて冷たいし、湿気があがってきたら嫌ではないか。近所じゃ窓にもタンスを寄せたり、ベニヤで目隠しをしたりして、あんまり顔を出したりはしないものだ。

一年中見ることもない者のほうが多い。ところが彼の家は丁度居間の窓が水路に向いていて、あぶないから子供は寄るな、孝作一人だけ一日一回は覗き込んだりしていたものだから、そんな余計なことをするからいけない。

ナルホド道理ではある。娘は泣く。これはこたえた。別に生計に困ってるわけでもない。いや裕福なわけでもなく、確かにやりくり大変ではあるのだが、一回分の給食費、いざとなったらどうにでもなるのだが、あたいの給食費、と彼の腰くらいまでの娘がべそかいてなんとかしようとするのには父親の情がほろりときた。

「お父さん取ってきてやるから心配すんな」

ほんとかと疑わしげにそれでも大泣きの手をゆるめてべそ掻きながら上目遣いに父親を睨んでいる。

「ホントだよ、縄持ってこい」

縄ってたって洗濯干すときのくらいしかないがね。家内はつっけんどんにそう答え、いやそれでいい。家の柱に縛り付けると窓から下に降ろした。彼の体重にはなんとか耐え得るようである。おっかなびっくり下を見ると暗くて深くとても怖い。

上だけ見よう、そろりそろりと降り始めたが、日頃運動なんぞしたこともない、己の体力のなさを思い知った。降りるといふより宙吊りになったのである。孝作はううと唸った。

ためしに足をばたつかせてもみたが何の足掛かりもない。かえって汗に濡れ始めた掌がずると縄を滑り始めて、ああ、もはやこれまで、急に滑ると手の皮がむけそうで怖いからせめてゆっくりゆっくりと縄を滑り落ちはじめ、結局数メートルの高さはあったのだろうか、たまらずハッと手を離すとそのまま谷底にストンと落ちた。

足と尻とほとんど同時に着地したような気持がしたが、思ったよりは痛くなかった。最初驚きと恐怖とその他もろもろで眩んだ眼が視界を取り戻し始めると、孝作はおっかなびっくり周囲を見回した。

水路水路と普段から不潔な印象が強かったのだが、実際落ちてみると思ったよりは悪くない。いや、むしろきれいと言ってもいいんじゃないか。水はちろちろと細く流れる泉水のよう、顔を出している地面のほうは八割方を占めていて、そのはざまを水が流れる形。

地面はどこも濃い緑色をした苔に覆われていて、ふわふわと幸作の着地した地面もまるで絨毯のようではないか。水路そのものの幅は狭い。両側は切り立った崖にそこかしこ、これは多分シダとかなんとか言う種類の一応は植物なのだろう、ぴょんぴょんと葉っぱが生えていて、まあ、全体として見て、お寺かなんかの庭園に似ているのではなからうか。

息の落ち着いた孝作はそのシンと静まり返った周囲の光景にむしろ安らぎすら覚えたのである。はるか上を見ると、細長く切り取られた青空に遠く白い雲が見える。

ああ、これぞ幽玄の地、まさか我が家のつい下にこのような場所があるとは思わなんだ。孝作はいたく感心してしまったのである。

いや、そうではなくて給食費、もうなんだかどうでもいいような気もしたが、そもそもの起りは娘の給食費である。その袋はどこにあるか。流れもないし、たぶんそこいらに落ちてるんじゃないか、我にかえってキョロキョロすれば、ありました。つい彼の鼻の先に、濡れもせず、茶色の封筒が落ちていた。

それを拾ってふと考えてみれば、一体彼はこの上の我が家に登れるのだろうか、縄、彼の目の前1メートル足らずの高さにその先は揺れている。これにつかまって俺、登れるのか、降りるのだって、どちらかといえば落ちたに等しい。それでも他に仕方がないから封筒をズボンのポケットに入れて、えいと縄に飛びついてみた。

掴まることはできた。ただその先はもういけない。単に宙ぶりのまんま、ぷらんと縄の先に一人の中年男がぶら下がっているだけの状態で、身動きも何もできたものではない。

ヤッと腕に力を入れてみたが、二の腕の筋肉がふるふる震えはするものの、ただそれだけの話である。体はビターセンチも上へは移動していない。手を入れ替えて上へ昇るなど正気の沙汰ではなかった。

孝作は諦めてまたストンと着地した。しばらく苔の上で胡坐をかいて黙然としていた。それから見上げると我が家の窓が見える。小さな声で「おい。」と呼んでみた。何事もない。

もう少し大きな声で「おーい。」と呼んでみる。やはり返事はない。他の家に聞こえたらみっともないからひやひやしなながら声を出していたが、これではがちが明かない。もういいや、今度は口に手をあてて大声で「おーい。」と叫んでみた。水路の中に自分の声がこだましているようだった。はたして我が家の窓からぬっと家内が顔を出した。

「給食費あった」

そう言ってみたが、家内には何の反応もない。

「でられんよ」

「縄があるじゃない」

「だめだ。登ろうとしたがだめ」

「どうするのよ」

あくまで他人事である。

「梯子がいるな」

「ないよ。そんなもの」

もう取りつく島もない。

「どっかで借りてこれんかな」

「どこで」

「じゃ買ってきてくれんかな」

「そんな長い梯子売ってるかね」

孝作は段々腹が立ってきた。仮にも夫の窮状である。本心どうあれ、まるであんたがいけないのだと、家内は自分も被害者の風、面倒くさいのである。

家内と一緒にしてもうかれこれ20数年、孝作とその家内は見合いで結婚したのだが、お互い一年ともたずに隠しておいた本性がばれあって、お互いこんなやつとは思わなかった。

さすがに愛情とかそんな感情はもう考えたこともないが、それは考えるのが怖いからで、いったい普段家内は自分のことをどう考えているんか。常日頃のいつでもその無然とした表情から推察すると、突然離婚するとも言い出しかねない。なんだかそう言われても自然な感じはあるのだ。

しかしそれは孝作にしたって同じことで、毎日毎日家内の無然とした言動に、自然と自ら身を引く術をおぼえて、家では夫婦喧嘩ひとつしたこともないのだが、なんで自分の家でまで気を使って暮さなければならんのか、冷静に考えれば孝作の方だって離婚を考える権利はあろう。

しかし確かに家の家計や家事洗濯、あらゆる生活上の断面はこれ家内が仕切っているわけで、結局孝作の家は本人の否応もなく家内がその中心となって動いているのだ。

それは孝作がぐうたらと家の主人と言うよりは居候に近い生活を営んでいるからで、確かに稼ぎは小さな町工場で働く孝作の稼いでくるものではあるのだが、しかしながら、孝作は全く世間を知らないに等しく、それは孝作のズボラのせいで、実生活の面倒な部分は、孝作はもう全然無関心。工場でトンカチを振るっているか、家でぐうたら寝そべっているか、その二つの世界しか知ったことではないのである。

飯を食うのですら孝作は面倒で仕方がない。そうしてそれら面倒な部分全ては家内に任せて押しつけているわけで、そう考えると家内の腹立たしさもわからんわけではない。

自然とついたその習慣は、いまさら一人で生活するところを想像すると、それはとても億劫なことではある。と考えるとやっぱり苦痛は伴うものの、現状が一番に思え、従って孝作はいつ家内が頭にきてもう別れると言い出しはしないかとびくびくしているのである。

ともあれさしおりは、今のこの窮状をなんとかせねばならぬ。

「どっかあたってくれんかな、それともこう縄梯子みたいなもの作れんかな。どうにかしてくれんととにかく俺はここから出られんよ。」

「給食費の封筒、縄の端に結んで。」

どうにかする気になったのかどうかすらよく分らぬ。孝作は基本的に家内には逆らわないことにしているから大人しくその言葉に従って給食費の封筒を縄の端に結んだ。すると家の窓から家内の顔が引っ込んで、するすると縄が引き込まれていった。それきり音沙汰がない。

まあ仕方がない。梯子を借りるか買うか、それとも縄梯子みたいなものを作るのか、どのみち時間はかかるであろう。まさか見殺しにもするまい。しないよな。ちょっとその辺胸騒ぎを覚えんでもないのだが、今の孝作の状況では他にできることもない。孝作はほうとため息をついて苔の地面に胡坐をかいて座り込んだ。絨毯みたいで気持ちがいいや。今度は横に寝転んで頬杖をついてみた。ひんやりしている。

あたりは静寂に包まれている。孝作は眠くなってきた。

ついついとうとうとしていたら、かたわらにストンと音がして何か落ちてきた。それではっきり目が覚めるとあたりはもう薄暗い。はたして縄梯子の先である。2本の縄に横にも縄を渡して結んだ簡単なものである。

孝作は横の縄に足をかけてみた。縄は彼の体重でぐんにやり歪んでしまって縦2本の縄がほとんど1本になってしまう。扱いづらいことこのうえないが、それでもなんとかかなりそうだ。よしよしよしと縄梯子を登り始めて上を向いたが、縄の出所の我が家の窓には誰も見えない。

やっとのことで窓の棧に手がかかって部屋の中に転がり込んだ孝作はもうすっかり息があがってしまった。四畳半の畳の真ん中で大の字になってフウフウ喘いでいる。

次第に息が整ってくると、台所で家内が食事の支度をしている音が聞こえた。

「飯！」

と、家内が叫んだ。

丸いちゃぶ台で娘を入れて家族三人で黙々と飯を食った。娘はけろりとして、おかわりとかなんとか言っているのだけれども、孝作はなんだか気まずい。理屈で考えればその雰囲気は孝作が自分で思い込んでいるだけなのかもしれないのだが、何故か孝作は自分が責められているようにいたたまれない。けれどもここで孝作が口を開けば、また家内から半ば怒ったような台詞が飛び出すと目に見えていたから、ただ黙って箸を進めた。

それからというもの、孝作は何か事ある度にあの水路の静謐さを思い出した。あそこには上の世界の孝作を日々煩わせている世間の軋轢とは無縁の世界があるように思えた。もう一度だけ降りてみようか、それがよろしいようである。しかしまたそんな酔狂な事をする者が他にいるわけもなく、だから人に説明するのもどうやっていいかわからない。

ああ、やはりここはいい。孝作はあらためてその静謐さに癒された。苔の絨毯に寝そべてこの前と同じように頬杖をついてみた。あたりは静寂に包まれている。か細く水が流れるその音までが聞こえる。ここにいればもう何にも煩わせられない。何を考える必要もない。ただじっとして、時間に身を委ねればいい。

ここは黙ってこっそり降りてしまうのが一番だと考えたから、家内にも教えぬ。普通の梯子があれば一番なのだが、10mは超えようかというその高さ、どこにもそんな長さの梯子は売ってはいなかったから、この前使った危急の際の縄梯子、これではちと扱いにくいと、二本の縄の間は同じ縄で繋ぐのはよして、そこらで拾ってきた木の棒や板を渡してみた。足をかけて二三度踏んでみる。うん、今度は良さそうである。

そういうわけで、次の日曜日、家内が娘の手を引いて買い物に出たので今がその機会である。孝作は家の柱に縄の先を結びつけると、反対側の端を持って窓の外に放り投げた。カタカタと音がしてだらりと縄がぶら下がる。孝作はそれに掴まって再び水路の底に降り立った。

孝作はうつらうつらしながらひねもすのたりと寝転んでいたから、ふと気がつくともう夜になっていた。見れば縄ばしごが無い。家内が引き上げてしまったのだろうか。なんちうむごいことをするですか。しかし孝作にはそれももう気にならない

そうして何も食べてないものだからひもじいことはひもじいのだが、それももうどうでもいいと思う。どうやら孝作は食欲という欲求と、精神を分離することができるようになったような気がする。そのことに気づいて孝作は自分で感心してしまった。

夜になると、あちらこちらの苔がところどころ光って見える。緑がかった燐光がぼうと夜の水路を照らしている。孝作の目の前の苔も光っている。手で千切ってみると、その光は孝作の手のひらに残ってとてもきれいに見えた。

上の世界からは何の応答もない。家内も顔を出さない。



そのうちにも時間は過ぎていく。もう水路に降りて数日はたっていると思われるのだが、空腹の方は感覚が麻痺してしまったようでやはりたいして気にならない。俺はこのまま餓死していくのだろうか、なんだかそれでもいいような気持ちもし始めた。

けれどもそれは成り行きに任せていたからそうなただけなので、別に孝作は積極的に死にたいわけではない。面倒ではあるが何か食べた方がいいんだろうなあという思いもあったから、試しにキノコを食べてみた。そこいらにちょぼちょぼ生えているのである。薄茶色で小さくて、10本くらいがひとかたまりでちょっとなめ茸に似ていた。

するとどうやらこれが食用になるようで、キノコの類ではあるから多分栄養はないのだろうけれど、そうして別に美味しいわけではなく、特別味もないようだけれども、腹はふくれる。どうせ寝たきり同然で生きているのだから、必要最小限の栄養素に足りればいいわけで、するとこれで十分間に合うようだった。

孝作は水路に暮らし始めてから痩せさらばえてはきたけれど、何日たってもどうも餓死する気配もないようだ。

時々雨も降って、その時はさすがに水路の流れも増えては来るのだが、苔の絨毯が水没するほどの雨量はない。願わくば現状のままで生きていきたい。一日中同じ格好で寝転んでいたら、やがて孝作の体にまで苔が着いてきた。

ナマケモノは体に苔が生えてくるのだと本か何かで紹介されていた気がするが、すると孝作もそれに近い動物になってしまったのであろう。

するとある日、孝作の遙か上空でガラガラと音が聞こえた。見上げると自宅の窓が開いていて孝作の家内が顔を出している。孝作の様子を窺っているようだ。そうして苔の生えた孝作を見て驚いている。

孝作は首を回そうとしたが、既に苔に凝り固まっていて中々首が動かない。なんとか顔だけほんの少し動かして視線をやると、孝作の家内は孝作がまだ生きていることに気がついたようで、しかし、安心しているようにも気遣っているようにも見えない。あくまでツメタク孝作の状態を観察して品定めでもしている様子だ。

けれども孝作はいつもならばその家内の一挙手一動目の色一つにまでにビクビクしていたはずなのにその時ついに落ち着いた平穩たる心根でその視線を受け止めることができたのであった。

それは恐れを知らぬという心情を通り越して、もはや限りない包容力をもって汝の隣人を愛さんとする聖人の行いにすら似ていたのである。

果たしてそれが水路の静謐の効果なのか、それともついに脳味噌にまで苔が回って多少思考力が鈍磨してしまったのか、幾分怪しいところがないでもなかったが、しかしそれならそれでもいいではないか。

家内は何か感心している風である。そうしてどう思ったものかしらないが、カランコロンと縄梯子を垂らすと自分も水路に降り始めたではないか。

おまけにその後娘まで続けて降りてきた。ああ、なんぼ少しは丈夫に作ってあったとて人間二人は無理である。孝作がぼんやりそう考えていたら案の定縄は窓辺でブツリと切れて、今度は家内と娘まで水路の底に落ちてしまった。これでは全く孝作の二の舞である。

そうしてそれから家内は、きゃあこりゃ大変だと一瞬慌てふためいていたが、やがてあたりをキョキョロと見回すと、ふと落ち着いた声で

「きれいなものねえ…」

全く孝作と同じはめである。娘も単純にわあキレイキレイとはしゃいでいる様子。

その言葉を聞いた途端に、なんだか自分のタカラモノを褒められたような気がして、いっぺんで嬉しくなって、ね、すごいだろ、綺麗だろ。現金なモノである。

「ウン」

家内はそう言って素直に頷くものだから、こんな優しげな家内を見たのは何年ぶりだろう。孝作はますます嬉しくなってきた。娘は娘でチョコチョコとそこいらを物色しては、

「これは苔？」

「ウン」

「これは何？」

「それはシダ」

「お水が流れてる」

「ウン」

娘は不思議そうにあたりを観察して、苔をちぎってみたり、臭いをかいでみたりしているから、こっちに来なさいと手招きすると娘は素直に寄ってきて、それから親子三人仲良く川の字に寝転ぶと、苔の絨毯がみんなの体を包み込み、それはそれは気持ちがよらしく、これがすなわち桃源郷というものかもしれないあと孝作はなんだか訳もわからず感心し、すると家内は、ほう、とため息をついて何か言おうとするものだから、孝作は、

「喋ってはダメ」

「考えてもダメ」

あたりの静寂を乱さぬようにと、そっと囁くと、家内も娘も返事はないが、何だか納得した様子で黙って頷いているようだった。

幾日時がたったのか、もう時間の観念もどこかに行ってしまったもののようで、今がいつだかわからない。それでよろしい、いや、そうでなければならぬのだろう、と、孝作は思うのだ。ここにおいて孝作とその家族はようやくと安住の地を見つけた気分である。家族三人じっとして、身動きすることもなくなってしまったから、例によって体は苔に覆われた。時々キノコを食べてはいたのだが、そのうち腕も苔の中、やがて食べることも忘れてしまい、しかしどうやら命に別状も無い様子なのである。

やがて季節は秋になったと思われる。苔は無数の小さな黄色い花をつけ始め、そのうち水路は一面黄金色に染まった中を、時にそっと吹くかすかな風に乗って、水路の中を黄色い花粉が舞った。きれいだな、と口には出さず、孝作はただそう思った。

日増しに微かになっていく意識の中で孝作は夢想した。そのうちには今度はいつか雨が降る。やがて雨が降る。すると水路の水かさは増して一人前の川となり、孝作たちはそれでも苔に覆われた川底であたりを見回すことになる。川は清流。魚だって泳ぐだろう。細く差し込む陽の光に川底から見回す水の中は青白く光の筋が揺らめいて、それはどんなにか美しいことだろう。

しかし雨が降ることはなく、それからいつしか冬が訪れた。きれいな花はなくなってしまったが、苔はどうやら枯れもせず元の緑を取り戻しただけのようだった。夜はシンシンと冷え込んで、寒いと言えは寒いのではあるが、体を覆った苔のせいかな案外我慢のきくようである。

そうしてある日、激寒の夜が訪れた。かすかに粉雪も降ってきた。細々とした水の流れは氷を張った。細長い空は、深い深い藍色に満たされて、月が見える。満天に星が瞬いている。孝作と家内と娘は自然と寄り添って、しかしもう寒さを感じることもない。ちらちらと落ちてくる粉雪を眺めながら、薄れていく意識の隅で幸福だなあと孝作はぼんやりそう思った。

次の日の朝、水路の底の親子三人寄り添ってもう動くこともない人型の苔の固まりには、白く霜が降りていた。